

Ⅲ 紹 介 Ⅲ

土佐昌樹『アジア海賊版文化』

澤 喜司郎

(I)

著者は「日本人の多くはいまだにアジアに対して特別な距離感を抱き続けているように見える。…もうそろそろ思い込みでしかない『アジア』のメンタルマップを描きかえてよい時期に来ているのではなかろうか。それが本書の投げかけるもっとも基本的なメッセージである」とし、「この大きな問題に対して、本書は紀行文と論文との中間的なスタイルから取り組んでいる。あるいは、民族誌というきわめて個人的色彩の強い方法に頼っているといてもよいが、そこには新たな意味も付加され」、「ここで試みる民族誌的方法是…文化を完結したシステムとみなすのではなく、なによりトランスローカルな流れに注目することで、新たな民族誌のスタイルを模索しようとしている」という。

そして「民族誌とは個人的な出会いをグローバルな文脈にまで届かせようとする記述の冒険であり、それ自体がいわば絶対的な矛盾に引き裂かれているともいえる。個人的でミクロな視点と、抽象化や鳥瞰的な方法を融合させるところが民族誌的アプローチの醍醐味であるといえるが、それはそもそも勝つ見込みのない賭けのようなものである。しかし、この不透明な時代にあって、文化の将来を見据えるために民族誌の果たす役割はますます大きなものになろうとしている」とした後、「本書は個人的出会いと時代の流れに左右されながら、アジア文化の明日に対してより普遍的な見方を追求した旅と思索の産物である。…叙述の主たる対象は韓国、中国、ミャンマーに限定し…すでに確立した専門的な知識を一般向けに平たく書き直したものでなく、私的見解を問題提起的な趣旨から述べたものである」としている。また、本書はメディア文化を主たる対象とし、「アジア文化が一定の方向に向けて変容する『形式』や『論理』を問題に」し、「問題設定の軸となるのは、『アメリカ化』『海賊行為』『公共圏』という三つのキーワードである」としている。

なお、本書の章構成は

第1章 アジアとアメリカ

第2章 ミャンマーの海賊たち

第3章 中国の海賊、そして文化とコピーの関係について

第4章 ティーショップの霧深く

第5章 ポピュラー文化が切り開く通路

終章 空高く、あるいはビル群の隙間からアジアの明日を見つめる

であり、本稿では各章の内容を簡単に紹介したい。

(Ⅱ)

第1章「アジアとアメリカ」では、「この半世紀の間に、とりわけ冷戦構造が崩壊してからは、地球全体がめざしている方向が基本的に同一であることがますますはっきりしつつある。それは、都市の景観を見るだけで自明である。歴史的景観の違いがまったくならされてしまったわけではないにせよ、今や世界中の都市は独自の風土や生態的差異を無視した同じデザインからできあがっている」とし、「アメリカとアジアが同じタイプの都市文明を志向していることは疑いもあるまい。環境や居住の快適さという面からいえば決して合理的な存在といえないその偉容は、アジアがアメリカとともに、ある種の神話性を帯びた『同じ』文明の建設を目指していることを教えてくれる」という。

また「アジアの都市に氾濫するコピー文化の意味をありのまま受けとめるためには、ローカルな差異にこだわり過ぎることはその妨げとなる。その点、日本はとくに自己愛的な『視界不良』になりやすい場所にいる。ついこの間まで日本はアメリカ文化の影響に徹底してさらされ、コピー文化の花咲く園であった。しかし、今や漫画・アニメ・ゲームが代表する日本のオタク文化は『クール・ジャパン』ともてはやされ、ポピュラー文化の分野で日本のアメリカ化でなく、『ジャパナメリカ』という造語とともに、アメリカの日本化が真剣に論じられるまでになっている」としている。

第2章「ミャンマーの海賊たち」では、ミャンマーは「文化のアメリカ化を問うのにもっとも無縁な場であろうし、グローバル化という言葉がこれほどむなしく響く社会もあるまい。これが外からのいわば公式見解である」が、「閉鎖的な体制といびつな発展を前提にはいるものの、この地でも文化のグローバル化は確実に進行している」とし、「政府の統制主義的な体制は、国内の文化的コンテンツを枯渇させる方向に進んできているが、国境を越えて海外から入ってくる文化の流れは、ほとんどが海賊版という形をとりながら、そうした閉塞状況に自由な風を運んでい

る。先進国では卑劣な海賊行為でしかないと断定されるとしても、ミャンマーのような閉鎖的な体制において海賊行為は人間の創造性を保障している」という。

続けて「政府は(時には外国からの圧力を受けて)海賊行為を著作権や知的財産権といった基準で取り締まろうとするかもしれないが、当局の目的はそこではなく、徴税や大衆の統制といった点にあるのは明らかである。規制の目をくぐり抜けながらしぶとく生き残る海賊行為のおかげで、大衆は世界の動向から取り残されずにすむ。そこには、紛れもなくロマン主義的な海賊のイメージが生きている。言葉を換えるなら、経済状況、国家の文化政策、大衆の嗜好などの複合的な要因との関係に応じて海賊行為の『意味』は変化する。そして、非民主的な政治体制と経済開発主義が組み合わさることで生まれるねじれた文化的二重性は、アジアでは決して例外的なケースとはいえないのである。民主化の進展が不透明で、また文化的コンテンツの『正常な』市場が形成される経済的インセンティブが望めない状況で、海賊行為が消えることは決してないだろう」としている。

(Ⅲ)

第3章「中国の海賊、そして文化とコピーの関係について」では、「中国が今や海賊ビジネスの世界的センターとなっていることは周知の事実である。…およそあらゆるジャンルにおいてコピー製品が出回っている。それはすでに逸話的な水準を超え、国内産業の根幹をなしているといって過言ではない」「映画だけを例にとっても、中国全土で『映画関連産業に従事しているのは50万人強』であるのに対し、『海賊版関連産業に従事しているのは100万人強』と言われている。それは闇の領域ではもはやなく、社会の主流で繰り広げられている一大産業である」とし、「またアジアだけでなく海賊行為の蔓延は世界的な広がりを見せている。しかし、その中でも映画の海賊行為は、シンガポール、香港、マレーシア、中国本土へと中心を移動させながらアジアが先頭に立ってきた」という。

他方「中国がWTOに加盟した2001年以降は取り締まりが厳しくなったといわれているが、実際には当局の標的は一部の『悪質な』業者だけに向けられた見せしめでしかない。少なくとも海賊行為にかかわる人びとはそのことをよく知っているし、それだけこの商売はすでに地に根ざした生業となっている」ばかりか、「日本が西洋にキャッチアップするため国を挙げてコピーをすることに専念してきた歴史も、完全に終わっているわけではない。今やその『コピー天国』という称号は、韓国、台湾、そして中国へと譲り渡されたわけだが、そうした『犯罪』の連鎖の意味は長

い歴史のスパンの中でさらに明らかにされなければならない」としている。

第4章「ティーショップの霧深く－公共圏から見たアジア文化」では、「グローバル化という言葉で語られる文化的現実の流動化は日本でも、ミャンマーでも『同じような』インパクトをもたらしており、その社会的合意を明らかにするためには彼我の表面的違いを超えた普遍的な視点が必要となる。こうした問題を展開するにあたり、『公共圏』の概念は大きな力を秘めている。公共圏とは自由で開かれた討論がおこなわれる場所のことであり、またそのようなコミュニケーションを支える水平的な社会関係を含んだ概念である。それは国家や市場とは異質なモデルであり、しかしこれなしに人間社会は成立しないほど根源的な関係性／空間性を指している」とし、その代表的な事例としてイギリスのコーヒー・ハウスとフランスのサロンをあげ、ミャンマーでは「たとえ先進国からは違法行為にしか見えないとしても海賊版を通じて同時代の世界と意識を通わせながら自由な『サロン』を形成していることが認められ」、「ラベッイェーザインと呼ばれるミャンマーのティーショップは、公共圏の好例と呼ぶにふさわしい、混成的で開かれたコミュニケーションの空間である」という。

また、韓国の大学のキャンパスは「民主化運動の拠点であり、また単なる政治運動でなくさまざまな文化的コミュニケーションの交錯の中で新たな価値が模索される場所」で、「大学という空間が韓国社会の民主化に果たしたダイナミックな役割に注目せざるを得ない。そこは世界の思想的フロンティアと時差なしでつながった討議の場であり、教養を身につけた人間同士が出会い、デモと文化的実践を通して政治意識を表現する空間であった」としている。

(Ⅳ)

第5章「ポピュラー文化が切り開く通路－『韓流』が見せたアジア的交流の可能性」では、「21世紀になろうとする時期に東アジアから東南アジアにかけて韓国の音楽やテレビドラマに対する流行現象が同時多発的に生起し」、日本では「あくまで世代とジェンダーで区切られたサブカルチャーの出来事で」、「それが中年女性を主体としているという点で…特異な現象」であるが、「韓国国内では事は単なる文化産業の問題を超え、民族自尊心や威信の問題としてとらえられる傾向にある」とし、その「韓流を生み出した社会的環境の変化として、グローバル化の衝突、文化政策の転換、若者世代のサブカルチャーの台頭という三層の動きを挙げることができる」という。

そして、韓国のサブカルチャーについて「90年代後半から韓国のポピュラー文化はまず国内市場で大きな盛り上がりを見せたが、そうした興隆を支えたのが新世代によるサブカルチャーであった。ポップスや映画で表面化した新世代の文化的革新は、国境を越えたサブカルチャーの潮流に連動しているのと同時に、国内の儒教的伝統とは激しくぶつかり合う種類の運動であった。旧世代に対する反抗を歌い上げる歌手が英雄視され、伝統的な道徳や性倫理をあざ笑うような映画がヒットを繰り返した。90年代後半から顕著になった韓国の文化的活力は、そうした若者の『反体制』的なサブカルチャーが、政府の文化政策の転換や文化産業の商業主義的戦略とうまく結合することで生み出されたのである」としている。

終章「空高く、あるいはビル群の隙間からアジアの明日を見つめる」では、「文化の変容は政治経済的システムの『発展』によって大きく左右される。このことは、1960~70年代の経済発展と80年代の民主化の流れを受けて今日の文化的活性化を達成した韓国の例を知る者にとって、素直にうなずける見解である。しかし、そこにある時間的隔たりは、文化の行く末が決して政治経済の動向と単純に比例するわけではないことをも教えてくれる。…顔の見えない経済大国から一転して『クール・ジャパン』ともてはやされ、『ミシュランガイド東京』が話題を呼び、日本の文化的水準の高さが世界的認知を得るようになった過程は、むしろ政治経済的地位の凋落と比例しているかのように見える。アジアの文化的軌跡を占うときも、それが経済成長や中産層の増大といった指標化された次元から一義的に決定できるものではないという認識はきわめて大切である」という。

また「今日、アジアの文化的交流を進めている最大の動因は、アメリカ的な市場（原理）主義と消費主義に他ならない。言い換えれば文化の商品化がとめどもなく進行している過程でもあるが、そのために文化がオープンで流動的な流れに投げ込まれることになった。民族や地域を越え、さらに性、世代、階級に縛られることなく、各人が自らのテイストに従って文化を再構築できる環境が整いつつある。万人にとって文化は宿命の問題ではなく、選択の対象となりつつある」とし、他方で「ポピュラー文化に代表される商品化された文化は、たしかにアジア文化の『現代化』とそれを通じた共通化に大きな力を果たした。それは風土の差異を無視し、伝統を破壊する面もあったが、自由で民主的な文化的交流の空間を押し広げてきた」としている。

(V)

本書のキーワードの1つである海賊行為について、著者は「海賊行為というものは基本的に国家と国家の狭間に生ずる現象であるという視点は重要である。海賊版を取り締まる国家機関も、国内と国外のコンテンツに対する対応の厳しさには明らかな違いを見せている。アジアの現実を見た場合、問題となっている国際関係において政治経済的な格差が大きい場合に海賊行為は繁殖しやすいように思われる。さらに、劣位にある地域が統制的な体制から自由体制へと移行する時期に海賊行為は繁殖しやすいという観察も可能であろう。そして、市場経済と民主政治が確立した地域では、徐々に海賊行為は駆逐されていく。しかし、そうした図式がアジアの現実にとどのくらい合致するか、また将来にわたってそのような予測がそもそも成り立つのか、まだまだ余談を許さない」という。

なお、中国では盗作版を意味する「山寨」という言葉が広まり、「山寨文化」という言葉まで生まれている。「山寨」とは本来、中国の王朝に抵抗した盗賊が立てこもった山中の城塞の意味で、これが広東省を中心に違法商品を製造する地下工場を指す用語となり、コピー商品は「山寨機」と呼ばれているという(「読売新聞」2009年1月26日付朝刊)。

最後に、浅学非才な筆者には的確な紹介ができず、また筆者の不勉強による誤読の可能性もあり、この点については著者のご海容をお願いする次第である。

(光文社新書, 2008年12月, 234頁, 定価780円+税)